



門外
1833
卷二 84

13
1833
1-84

繪本太閤記
昌盛堂藏



詩を声何れも書画の象

おのの詩も如文と世なる

實ふおのの詩も如文と世なる

なるものなりこゝろ画を

何いも被る意中より来る



遠く縮め松より千載の古を
まひふ象と虎と虎と
初聴ゝこゝ松文即是也
其右関の初生る松天下
権を掌握する及ひ一世の

権功に松をこゝ松文即是也
其右関の初生る松天下
権を掌握する及ひ一世の
松文即是也
其右関の初生る松天下
権を掌握する及ひ一世の

世に孫平久

氏人枕をうて腋に抱

干戈之下急能世に有るを

高橋のちきりひの秘を

久々 出来 治世の象徴

思以爲所傳之修

吾其職を修む事

我祿之於神

方廣殿ハ豊古ノ宮也

しるしに予に殿下の

吏より属するを以て此等
之は流るるを以て予
久等ふ之を以て國
需る所を以て
の爲に責むるを以て

寛政丁巳歲初秋



大佛殿吏山下大和守

源重直

五



繪本古図記惣目録

第一之巻

發端

日吉丸誕生

日吉丸見小六

小六考日吉丸智

松下加兵衛見日吉丸

後吉郎與宇市試劍法

後吉郎初陣高名

第二之巻

後吉郎為越尾州需糧

後吉郎為越尾州需糧

大新編 繪本古図記 第一之巻

後吉郎為越尾州需糧

修好者考相友吉郎

鐵回家高祖

信長子僧供養

平手政秀諫死

信長共奇友道三會正法寺

信長奇謀斬堀田春日雨士

友吉郎見參信長卿

友吉郎事信長卿

友吉郎小牧山築樹木

第三之卷

友吉郎娶友井又右衛門女

友吉郎普法奉終

割普法之法活破換

反間計殺戸部新左衛門

佐久川合戦

福富平左衛門共葬

友吉郎獻計策

信長援岩倉城

堀尾茂助力戦

第四之卷

論本下與上將利槍長短

本下上島調練槍法

本下上為試滄長短

信長軍設設

及吉郎共主水我滄法

及吉郎智復主水

大山領強動

及吉郎智謀一揆

及間謀斬山淵父子

山淵父子之命

第五之卷

平手與本下論兵書

平手監物布陣營

本下及吉郎知加増

信長孫七箇所告

及吉郎定謀於江州

及吉郎説佐々本承禎

江州援兵至尾州

今川義元屯桶狭間

及田大基代孫九根城

今川義元陣烈

第六之卷

信長出張桶狭間

信長進間道討義元

柴田池田斬敵將

大森代血戰勇力

今川義元討死

信長之破今川軍

信長發向足濃國

友吉郎作延差物

竹中半兵衛破織田勢

友吉郎妙奇計

第七之卷

瀧川一益欺服部左京

瀧川一益棄棄名

服部左京奏解江

信長上洛調ね軍

佐久間信盛築洲股砦

友吉郎再築洲股砦

小六黨我足濃勢

洲股砦成一疾

竹中重治洲股移閑居

第八之卷

信長攻齋友龍貞

友吉郎龍衣稻系山搦手

堀尾茂助導稻系山城內

稲葉山之城陷落

久生瓢箪之由來

信長發向勢品

山路彈正偽降信長

三好松永等越君

三好松永確執

第九之卷

六角承禎謀害覺慶

義昭公受濃國勅座

明智光秀素性

明智光秀見殺

於市方嫁淺井長政

信長與長政會佐和山

本下辰吉郎叔危急

明智光秀謁信長鄉

織田大軍討三好

辰吉郎拔和回山城

第十之卷

坂井久義斬建部源八郎

樽長八郎拔坂井久義

明智光秀夷箕作城

箕作落城

六角承復觀音寺城退去

友吉郎攻森山城

柴田勝家妻日胜城

信長上洛再真足利家

岩成主税助勇哉

第十一之卷

明智光秀攻池田城

明智光秀説池田勝政

松永彈正属足利家

義昭公將軍宣下信長任官

凶徒等襲本國寺

本國寺合戦

凶徒等敗走狐川

信長再上洛

爲信長怒燒堺町人

第十二之卷

友吉郎計略説堺町人

堺町人所爲禁獄

石山上人救町人等罪科

令友吉郎以首代僕罪科

室町所造營

信長御弔國

惣目録終

繪本右圖記第一之卷

目録

發端

日吉丸誕生

日吉丸見小六

小六考日吉丸智

松下加兵衛見日右九

後吉郎共宇市試叔法

後吉郎秘陣高名

一身禍福憂國之心
利然在利義之間谷
風所吹葉莊之比是
讀此冊子之要

拙古哉孝



正二位小田右大臣信長公像

信長公像贊

足利氏末禍亂如揉四海雲擾干戈罔休
天誕鉅武英發寡儔兵威日盛戰無遺籌
抑強扶弱育穀除蠹遠畧益展將逮九州
嘗肆嫚罵股肱成仇賊穿暗路火滅崑丘

平安皆川愿謹題



藤吉郎像贊

公之未出世喪乾坤天生雄傑夢兆朝暉
 將耀其照以破昧昏儀表殊異面貌類猿
 迹多可議德協彼元用兵如鉅芟彼凶頑
 忽擢卒伍俄主大藩視之其末尚是泥蟠

平安皆川愿謹題



木下藤吉郎像





竹生^ろの^まの^ろの^ま
之^の圖^の



繪本太閤記卷之五

發端

積土成山、風雨興焉。積水成淵、蛟龍生焉。微少も積る止ざれを
必強大みよる。中朝後奈良院の朝廷、天文の時、幽ひて天一人
の英雄を降し、此人歴世の大仇を誅め、万民の塗炭を救ひ、海
一統堂に據り、まが餘り遠く朝鮮と征し、被邦人をくく、雷震の
おとく怒き、く鬼神のくく、敵し、む是尾形忠晴、中村
の土民筑阿弥が子に、多量名を日右九と、ゆび生長て、本下
辰右郎と名乗、後の称ひ羽柴筑前守、天下一統の後、終に關白
職を経、豊臣を圖、贈正一位を、國大明神と号し、なり、大擲
事、子市は老翁と、其武徳成功をるむ、豈小と積で、大と

と謂ぐらんや、其高祖を思ひ、是利の季、應仁の乱、山名
細川を記せしより、以来、天文弘治、永禄元龜、天正の間、
あつても、なん百の余、天下麻のくく、これ英雄豪傑、國に
踏起し、威を張、力とあり、く、君臣、弑し、父を殺し、あつひ
起り、又く、い上天子のく、れより下、庶人の縛き、を安さ心、
みなく、涼き淵、糸と、落き、氷を踏、おとく、恰も七雄三國
又彷彿、安ん、敵山西塔の僧、又、昌盛法師と、名者あり、はら
く、天下の形勢を、く、於、王法佛法、く、も、又、廢し、死せ、
是死せ、死し、泰平の日、く、く、と、知る、の、く、く、く、て、天、
の人民、く、く、く、終、羅道、又、墮落し、何、日、く、成佛の期、又、
んや、不、冷、今の世、れ、衆生、海、度、く、天下、泰平、なり、く、ん、み、





ひよき
日吉丸
誕生

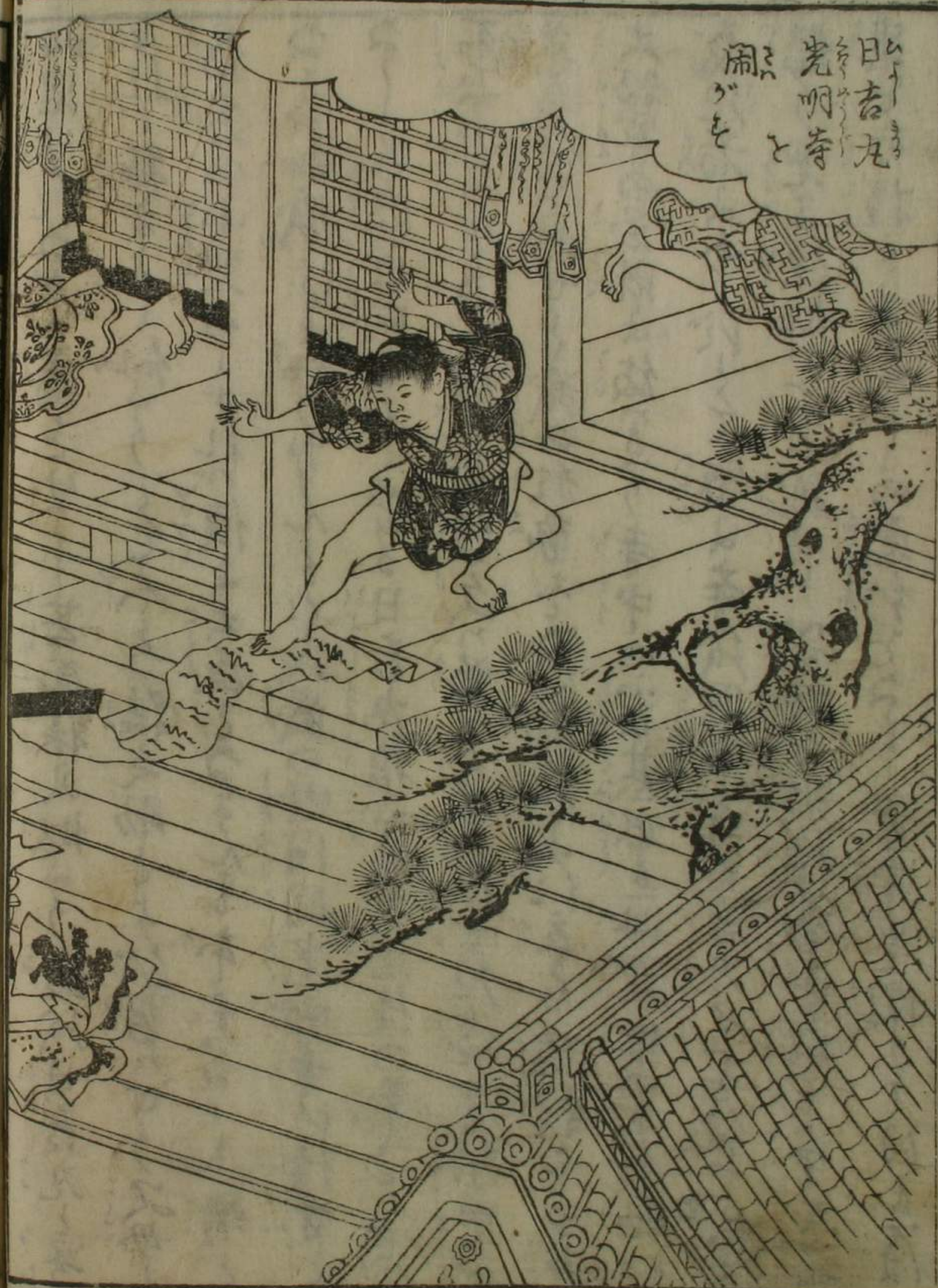


く宛阿弥と号と妻にお萩中納言保蔵の女たる先は保
蔵の安実の罪よりて尾張國の流人となり彌師治をまが女
子とて一女子を儲け種なく罪と赦され改治し給ひの女
子母りるも都へ入るべき契縁ありしが保蔵をへくふま
る給ひぬる日蔭のふり母方の祖父治をまが治み生
長し奇偶やむらん弥助昌を妻とあり夫婦むむく
言しつる此妻日吉控現み初て男を得んを希ふ其
靈ありてや或夜の夢み日輪懐み入と見え忽懐妊し孕み
十三月附み天文丙申正月元日寅の一天男子出生と其父
屋の上は靈星現れ照をみ白月のおく生長の積徳の
時又徳いふ此星とにけられ山を將てとをみたるは

此児生れぬる園を生し其面様み似たり名は日吉丸と号
されと様より似たりとて人より様之助とよび習せり又母も
尋常の小児ありしが後より女と成るも本意なり僧と
なりて知識もあがりかんく八歳の時日國光明寺の後方と
なりて仏學問をとりける日吉丸雅心も僧徒の業を食ひ
不取かりときらひも習學文の曾てなりて遠りけ小児を
集り竹を折せり我の形勢をば自石とて立く指揮とる
大將軍の墨既より依りて寺中の安其思此児僧業を勤む
るに者ありて密に寺に退んと日吉丸を授け大
怒り児を法師をお擲し器物と破經卷を礼し奉る
来とお授けとさまぐの要約とて寺中を開けけは



日吉丸
光明寺
周



恒持胎育いづぐ親里こそゆゑに父元來お妻いけ
を妻の後身清溪の源なりとて商人とれど日吉丸を
公みきりしれど又年級不し一季乃五月二月ふて
悉く追出され遠参尾濃の國に仕人と需るひ三十八
偏み尋家入の甥度重世に勝とされぬ縁のふく恥と受
づくにも神の種い主人の尋氏量已が業みあつた出
振奮みを終る主人の怒りを受く此陶器家めても一月
斗い家業のふみはひなく飯器四鉢と作る年久し
き先世み勝る主人も深く是と電し世に文き物と思ひ

つゝとく意りながら風み出く夜に海り昼とくも眠み
暁らば夜中又心は狂せたまふい歩ひ放蕩限りなり
と此主人思ふあつて放て怒りど其後捨てる時
其家の雅子三歳なる所抱とよりはみおひて戯し
居るじががれ賜しき業をなす何日までも人み麻う
とんやとて彼小児を母のえへはき糸糸成りみ筒の簾
まうと繕り付ぬる助る人みずし暫く其不み辛抱せよ
と捨て三河路よりて出ひたり

日吉丸見小上

宿み尾良海道那の住人勝須賀小上正勝とて於者なり
とて世の習ひに近國の武士とてかゝる東國街道み御



い
う
ま
日
右
丸
児
守





日若丸
 小六五
 見ゆ

真景言初卷一

細く落武者の武を剥き人々に押入財宝を奪ひ其の
下み属する者一々余人勢い迫り震いたる武夜属を救ふ
引き一園傍橋と云ふは彼日吉丸此橋の上より渡り
前後もあつてあつた小六通りさまは日吉丸を蹴て外
出る日吉丸目とさほ大と怒りはるに奴ならぬ不れをな
とや我幼雅とくもはるは恥しさをかうむつたは我前へ
来りれをなりて通るべしと云ふ小六怒りたきあつたは十二三
歳の小児なりたれは心も甚だ思ひき不れと耐へて
しもは河内國つたる者の子なるぞや幼とあつてふ款乃
一言感づるふ余りあり我は信いな公せは厚く意をては
うあつと云ふ日吉丸あつたの事を物語りえより終

る方なりははるきま人のは信みさういは人ならんこ
つ小六大いなるび我は業とくは強硬の強さを破り
財宝と奪ひ心の候は栄耀とくは幼雅とくもさうき
者なり今宵を公の御ちみえき家家のあへもき
て其方が器量を見え功よりて称えと云ふ日吉丸
令養一先より園傍の所よりあつたは心密に密に用心堅固に構へ
三軒斗垣と云ふは思ひき密に密に用心堅固に構へ
うり小六下知しあふ東の端なる家こそ入み候りあり
退く心易し彼家み押入るしと云ふ下の者もさう
えつと戸にまき寄樞と云ふは戸を打破んと日吉丸を
を止め虚と何て財と奪ふと着いて勝利あり我此門と

小六考曰古九智

扱さくり小こ六ろく正せい勝しょうの目め者もの九くを尋たずねるの者ものみあはれと思おもひ其その智ちと
 試しんとしてある時とき目め者もの九くを近ちかく扱さくれ汝なんぢ年とし幼おと雅やとくも才さい智ち
 たくましく人ひと並ならむ働はたらきをなすは吾われ刀やうにいくんぞ、此この刀やう
 いまに村むらにりて我われ秘ひ藏ざうする指さし料りょうなれども才さい智ちみ成なりて三さん日にち
 の内うちは強ゆゑと云いふ汝なんぢの物ものとなりて常とことくなく日ひ者もの九く雅やとく
 と令しづ常とこし座ざを立たて退まうきたり小こ六ろくの村むらにを扱さくえにむし
 扱さくりも眠ねむらず用心しやうしんと其その夜よも汝なんぢの夜よも日ひ者もの九く曾そうて来きたり
 才さい三さん日にちの夜よにありて雨あめ来きたりて降ふく物ものをくく小こ六ろくの村むらに
 心こころを配くわり目め者もの九く来きたりて汝なんぢの夜よも子この刻ときに雨あめふり月つきとみ
 人ひとありと笑わらへと雨あめの笑わらをくく喜よろこぶとくなく扱さくり後あとめ



小六
日吉丸
智を考ふ

夢び来り我寢るを伺ふこそと息をはめき居たりと云ふ
 疾もかろくと明後と日吉丸の終み来り小六の三日
 間まどろまど心神勞れようて那ううろ漸あつて目
 覚めたりと云ふにこの村の力は大きき事といそき日吉丸
 を咄せむと云へり日吉丸の村に服むと云ふ小六が
 前に出た小六が其甚き思はれが智斗我曾て及
 びて来たのりき事と云ふれり感心と云ふるそ
 日吉丸雨りの下み笑ひたりを捨て志のびきりし神は
 りてなりそれの寢るなりと云ふのさくよく寢て疾
 乃明る小六が其神寢るなりと云ふり知り志のび入て盗
 るなり其計畧あるなりわかれど

松下加々清見日吉丸

去程み中村於助昌吉の日吉丸が長松の高家と云ふ
 と既一季に及ぶも風の便りもまへに母の憂は
 んと書し老やゆらん南やゆらん昌吉と云ふは於助
 昌吉と云ふ細われは又日吉丸が終末も終末に案
 然と云ふなり清原の源たる母の憂はを母の心
 うふりて日吉丸が立寄る終ると云ふ心をはく
 其ういありと終田明神へ参詣するなり終る日
 吉丸と終合する源たる大に云ふ母の歎きと終る
 是れを云ふは我が家に連なり叔もけ年月の終る
 是れを云ふは我が家に連なり叔もけ年月の終る



松下加兵衛
日右衛門
をいふ



妻しく物語とは源左の太きと尋ねた彼は由り續き
本なり再び彼を以て終るなりとをのゝ家に書い
母もかくと語りしに母の終ひ大方なり此れ終
るに主人をたのむ宮仕をせんと呉く物もばゆれと源左
此門も日吉丸が終快と跡をぬきば行地へ仕へりとも未
永く勤むと若ぬあつて其後又母のやゝに負ひけり
爰に多笑の社親音院の順光坊と云僧諸國の大名諸士
の家に御祈禱の御れを配納しつるが石健と云下僕
那して又ふ終いと此れ又日傭の人を需んとと源左つ
かりと終ひ日吉丸と順光房の下僕と云し東國へこそし
る終る又日吉丸終中宿と向うぐつて其の事其の終

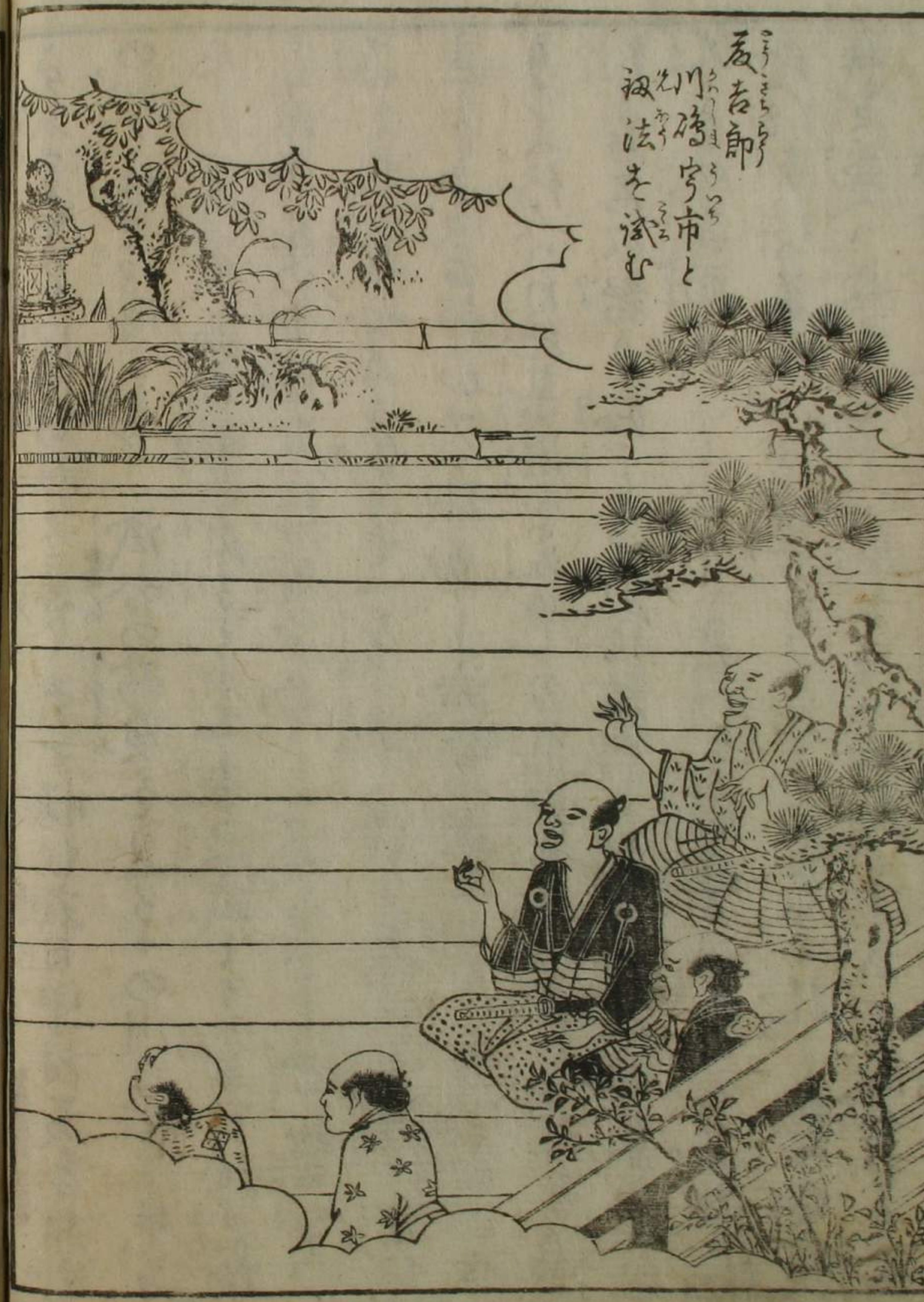
つかつか物語と終つて順光房太にゆきつて終つて
を以てつて日吉丸と終つて終つて遠く遠く終つて
松下加無湯尉之終つて家に宿をけ之終つて武郷無學の終つて
を以て今川義元の終つてつてつてつてつて今川一
家の武名の終つてつてつてつてつてつてつてつて
順光房と終つてつてつてつてつてつてつてつて
く眼中に重腫あり近く近て物語をなると云語を明めて
其の終つてつてつて松下壽喜とつてつて甚怪と順光房
を以て下僕と終つて順光房元素傭ひつて人なりと終つて
なり日吉丸を松下が終つてつてつてつてつてつてつて
とて之終つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

の諸士曰く松下が如く来り、是の餘部郷の村者古昔より
鉄炮又曰と著し、後軍學無書を講し、一日一夜乃爾
たり、曰く九姓しき事に思ひ、少のつゝはれ、あれ、かの
古く親衆し心の内み習得せり、後、腰を隔て、無書を
悉くこれを習し、記し一をきて、万と衆し、頗武郷無學乃
強、而その大抵を記憶せり、後、秘めて、是を止せ、年たりて
十八歳、天文廿二年の春、前服し、中村辰吉郎高者と
名乗り、慢りたり、執仕し、たり

中村辰吉郎与川崎守市試劍法

松下が身、又の中、川崎守市と、人、血争の若者、其力、
衆、又、鐵、又、刀の郷、又、慢、下、松下、門、下、の、陸、一、と、自、負、し、人、と、見、れ

た、故、の、あ、り、曰、門、の、壯、士、悉、く、是、と、情、む、我、日、中、村、辰、吉、郎、例
の、如、く、舊、古、場、と、あり、試合の勝負を、見、る、の、川、崎、守、市、辰
吉、郎、み、細、い、は、妻、男、の、身、か、り、て、毎、度、我、く、が、舊、古、場、見、物
と、我、師、の、下、僕、な、れ、が、定、めて、お、り、嗜、み、る、は、舊、古、場、
な、れ、が、我、合、も、と、あり、て、一、ち、刀、試、し、得、る、と、し、と、情、り、進、む
と、し、も、辰、吉、郎、か、く、拜、退、し、試合の期、は、條、々、容、耐、ぬ、と、し、
り、の、み、付、く、自、他、某、勝、を、な、し、て、も、其、の、毒、と、迎、え、る、は、守、市、
引、く、と、し、に、怒、り、汝、と、し、に、小、冠、者、何、を、我、を、お、負、ん、事、怪、の
大、言、武、士、の、面、を、し、く、し、く、来、り、と、勝負、を、決、せ、し、と、本、刀、構
え、に、來、し、辰、吉、郎、今、の、詮、方、な、り、曰、く、本、刀、構、え、く、舊、古、場、
み、え、並、べ、ぬ、較、多、の、門、人、息、を、は、め、こ、の、押、り、し、は、武、合、なり、と



夏吉郎
河内市と
初法を減む

奉を極り見物と宇市に居る小冠者只一歩は教と
 と本刀を大八相に構へ徹摩なれとおてうををなう
 たりにうづし付入る宇市たるの目の上はとておて
 宇市眼々うんで左刀筋えとひるむと左刀歩落し勝負
 うふと知るれに並居る門人一同はうろくともう宇市
 の面目は多いとまきうろも席を立て隠れし御宅とる
 松下加え清けりすとまきうろに怪し居る居る其終終とる
 み居る居る其曾て武術をうろるはし曲にうろ諸
 門の稽古を熟し密に心中み之と稽り居る居る
 時々一人み對してお合うる今日こそおめわりとやうに
 松下居る感入は相親居るなるに後果して出方とる

今日より武術無書の奥儀を悉く汝に教へ我腹心と
 まぐとそよう門人一同席して其の稽古をうろ切
 徹摩の功を積るより出る居るより其終終とる

中村居る即秘陳高名

弘治三年の春小糸氏政氏父子大軍を率へ強兵八
 一富士川に今川義元と合戦小糸の勇が修後日向守
 ゐる餘騎門を渡して今川の先陳おはる中守といふ
 我おはる中守三ふ余人にみから歩立の兵又百騎
 長柄の槍おて修後勢の川を渡して進み来る我
 まうまに修後日向守下知居る騎馬の武者一ふ人
 ごとと鳴てけし出騎波をけつて戦ひたれおはる歩立

者教ふみく遊より修後勢向まをまうと返ふ又地の
 たるより新法系が伏兵一ふ余騎修後が勢の中と戒切たる
 流を雨のおくくお出し喚ささくんく戦ひたれば修後方
 付る者教をまうにける流にぬく敵を日向守いふ合せの
 戦ひは敵の斗ふの味方敵小くは敵はくは惜き事いふ
 して士卒を励まうとくも敵軍の勢いも返し合と無
 もく力及び殿して退きうが勢一日よはと後り弱
 死せんも拙くと一町斗川にぬり士卒多ふ瀬ふとせ
 堤の上は馬をまうと拙くう富は松下加え清之綱も義元の
 石も急し旗本と望めろが出陣の時本下修後即ち勢は
 加り戦ひは強んふを希とくも加え清之綱をとめるさ

後者即力なりとされはとく家止て主人の生死さへん不知も
 本意なりと知事の方と具足一錠かり出陣して戦場は
 あり合戦を見物して居よりうが今日ハ我神陳なれば
 首よりてる名せんところよ富よと何ひくは修後日向守只
 一人地は馬をまうと味方の利をまうは居より修後即ちこれとて
 よれ敵とまうれと一帯に馳来り日向守は棄より馬の右
 後をまうに突通せば馬は勢たさくわが日向守もたまり
 得ど大地へうと落よりうる後者遠きは走りお踏付て
 の透間二刀に押さく首をお落し本陣うてぬくは
 修後が士卒をまうとあれよくとあせれば川中のゆる
 まは急は堤へよりぬく敵はちやきなればとさき方へけ者



氏政（源）を以て後右即候者看と提松下より多く事の次第成物
 濡れ加え湯之徳よりに勢に於て其首を以て大お義元
 披露と義元後右即と近く石よせ西の襲討を賜ひ多きば
 信臣の面目と勇で席を退きたり叔父東方より神度乃合
 戦を仕換へ先攻の恥辱雪んと大乃寺磯河守七々余騎
 して川と溪と今川方より飯尾を布守新田宗久督つて使と
 立陣陣鉄炮とあけ槍を合せく攻戦小宮久保後日向守が
 姫又後援弥他とくる大別の勇士あり叔父が討死を憂ふとい
 吊い合戦又敵の大お成討多んと只一人今川の本陣へ切入り
 松下加え湯之徳とくといふより馬を飛して馳来り槍と搦
 と密に槍を弥他に宝壽院の建徳に交練しつれば松下と

倉合くらあひせす付斗つと戦いくさいさか松平まつだいらの神保しんぼ健けん槍やり又また引ひけ
 と既すで又馬うまより落おちんとは居ゐる者ものを走はなりて槍やりの柄えの中うちより丁てう
 切きるやせば俘ひまふ馬うまよりとどと落おちる之綱得ゆづらぬりと槍やりをのべ
 く突つくと馬うまより飛とりり母ははを多く首び取とりて此このとき時既とき又日
 光西山こうざいに傾かたむき兩陣りやうじんは又據所よかりどころ鳴なりいて軍いくさを母ははと冊ふみを焚くわて
 對陣たいじんと其その處武田信玄ぶたのしんげんより山本勘助山形三郎玄備やまもとのかんすけやまがたのさんじろげんぽの支さね
 ん令しるし々小糸今川こいとけいせんの和順わじゆんを立たて結むすぶ武田ぶたのの威いかで後あと
 異い様さまなく和濃わなんとの軍いくさを活そとめて城きやうへ入り

法橋石田五山といひて明より文化と
のありしは世極別客画の二冊に
終本を國地と先生河探撰毫
ありし故有て徳川幕府に板
然役せしむるもの也

